



TITLE:

<大會抄録>京都客寓時代の羅振玉 と内藤湖南の交友について

AUTHOR(S):

杉村, 邦彦

CITATION:

杉村, 邦彦. <大會抄録>京都客寓時代の羅振玉と内藤湖南の交友について. 東洋史研究 2002, 61(3): 493-494

ISSUE DATE:

2002-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155430>

RIGHT:

いては、骨階層と頭品階層を併せた八階層からなる秩序構造が六世紀に成立したとする通説に對して、九世紀になって眞骨以下の七階層が成立したという説もあつて、その史的展開過程はつまびらかではない。しかし、一九七八年に韓國の國寶に指定された新羅華嚴經寫經跋文（七五五年）に「六頭品」身分の者が檢出され、九世紀成立説は存在しえなくなつた。

ただし六世紀にさかのぼつて多階層からなる骨品制の成立を裏づける明證は全くない。解明の糸口は、七世紀後半まで新羅王京人の身分標識として内外に誇示された六部（「地緣集團」）と骨品制とがいかなる連關を有していたかの検討にある。これを手がかりに、その骨品制度成立時期が七世紀後半にあつたことを提唱してみたい。

地方の商會と在來産業の發展

——河北省高陽縣一九〇六—一九三七年——

リンダ・グロープ

我々の、二〇世紀の中國における商會の役割に關する知識や見解のほとんどは、中國の主要都市の商會の残した記録をもとにしたものである。最近の商會に關する研究は、商會の政治的な役割を檢證するものや、商會の活動が實際に清末民國に生まれた市民社會で始まったのかということを問うものが多い。これらの論文では、主要都市の商會を據點としていた「紳商」が頻繁に研究對

象として扱われている。しかし、この論文ではこれらの研究から視點を變え、ある小さい町の商會の經濟活動を檢證する。

中國における最初の商會は一九〇二年に上海で設立された。それに續いて一九〇三年に天津と福州で、一九〇四年には南京、厦門、重慶、そして温州でも商會が設立された。一九一二年までには全國に七九四の商工會議所があり、その内の五一の總合商會は大きな都市に、そして七〇〇以上の支部は縣や地方の比較的小さな都市におかれた。高陽の商會もこれら多くの小さな商會の一つである。

高陽商會は一九〇六年に、商會の設立に關する規定に従つて設立されたとはいえ、その實際の活動は日本の産地における同業組合に近いものであつた。この論文は高陽商會の様々な活動——産業の發達の促進、税金の優遇の獲得、商業に關する知識の供給、そしてその役員の中國全國商會聯合會における活躍による高陽の知名度の向上——を通してこの商會が高陽の纖維産業にどのような貢獻をしたかを明らかにするものである。

京都客寓時代の羅振玉と内藤湖南の交友について

杉村邦彦

羅振玉（一八六六—一九四〇）は、清末民初を代表する碩學の一人である。特に著述の宏富な點では、『羅雪堂先生全集』全一四〇冊によつても明らかなように、古今に冠絶すると言つても過

言ではない。彼の學問研究を類型的にとらえると、清朝になって著しい發達を遂げた金石學、訓詁文字學、校勘輯佚學、版本目錄學など、總じて樸學の範疇に入れることができる。彼の龐大な著述をその手法上から大觀すると、對象のいかんを問わず資料の集録と歴史的な考證の二類に大別することができ、このうち集録が大半を占めていることに氣づく。彼はなぜ資料の集録にかくまで精魂を傾けたのか、そこには切實な治學の動機があつたと考えられる。

羅振玉が活躍した清末民初は、甲骨、彝器、漢晉の木簡、敦煌遺書、新出の石刻、舊鈔古槧などおびただしい文物が出土ないし出現した時代であり、彼はそれらを過眼できる喜びを“文字之福”と稱した。しかし、一方では革命軍の蜂起、清朝の滅亡、先進列強の侵略という未曾有の激動の時代でもあつたから、それら珍貴な文物は巷間に溢れ、海外へ大量に流出した。これは彼にとつて“文字之厄”とも言ふべき深刻な事態であつた。彼は“文字之福”と“文字之厄”が同時に押し寄せるという未曾有の時代に際會し、幻のごとく眼前に現われ、幻のごとく眼前から消え去りゆくそれら文物・資料を繋ぎとめ集録することに精魂を傾けたのである。

集録への情熱は、宣統三年（一九一）から民國八年（一九一九）までの京都客寓時代に、内藤湖南の協力を得て、ますます拍車が掛けられることになった。それは一樸學者がたどつた激しくも孤獨な営みであつた。今回の發表では、彼の人間像、生活、交友、書法なども視野に入れつつ私見を述べたい。